

今を生きる

〇②〇

原発事故の現場から

「ここが1号機、免震重要棟はこの辺り」。東京電力の協力会社に勤務する富岡町の四十代の男性は、白いノブに福島第一原発の見取り図を書き始めた。「海」の文字が、あの日を境に一変した過酷な現実を突き付けた。

現場に立った時、鳥のさえずりが聞こえた。作業員は少なく、周囲は静かだった。骨組みをむき出しにした1号機を目にした瞬間、全身が震えた。

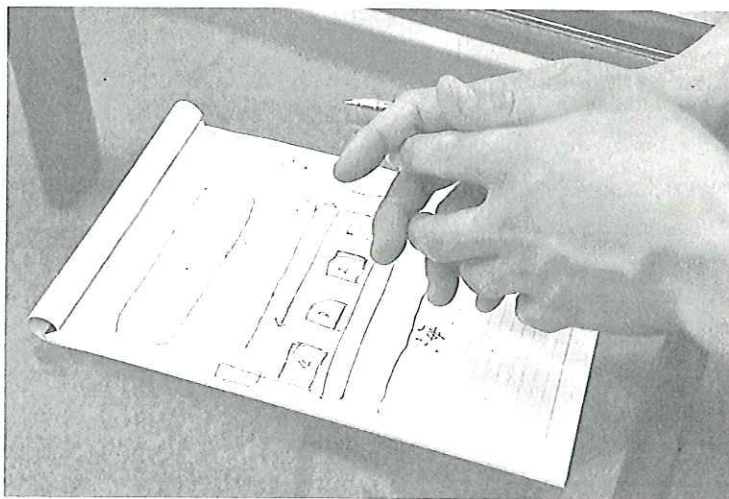
「ケン 近寄るな」がれきが散乱する敷地には、至る所に赤いペンキで書かれていた。

震災から数日後、川内村の避難所で携帯電話が鳴った。発信元は会社からだった。現場に行けるか。聞き返さなくても、それがどこなのかをすぐに察した。

相次ぐ余震、止まらない原発事故に妻と子どもは不安な日々を過ごしていた。それでも、誰かが行かなければならないと分かっていた。現場に

向かうと会社と家族に告げられた。現場に立った時、鳥のさえずりが聞こえた。作業員は少なく、周囲は静かだった。骨組みをむき出しにした1号機を目にした瞬間、全身が震えた。

古里守る思い一つ



男性が書いた福島第一原発の見取り図。古里を思う強い気持ちが過酷な現場に向かわせた

体をくの字にして休んだ。夜は余震のたびに目が覚めた。眠った感覚がないまま朝になった。線量計が示す高い数値に初めは戸惑い恐怖も覚えたが、しばらくすると何も感じなくなかった。六ヶ野の放射線量を

浴びた日もある。一般人が平時、一年間に浴びてもいいとされる線量の六倍に当たる。避難所から出発する朝、妻と子は「いつてらっしゃい」と、いつもと変わらない笑顔で送り出した。当時、原発はこれから何が起きるのか全く

分らない状態だった。「家族は押しつぶされそうに不安をこらえ、自分の帰りを待っている。自らを奮い立たせ、目の前の仕事に打ち込んだ。二月半に及ぶ作業で積算線量が会社の規定を超え、今月、現場を離れた。

同日によると、容疑者は東日本大津波や福島原発事故を受けて町から避難し、紳があっせんしたマンションに住んでいた。井谷容疑者はひどく、事情を聴けなかったという。同署を調べている。逮捕容疑は十時六時ごろ、マンション

道路工事の男性はね、交通整理中



美作 根本

同日午前十一時ごろ、伊達市霊山町掛田字挽地越の一五五号国道で、道路工事の交通整理をしていた二本松市鉄扇町四七八ノ一、警備員根本作美

あの日、会社の求めに応じ一緒に現場に向かった仲間もいる。復帰の理由も、去る事情も互いに一切聞かず、「頑張れ」とも言わなかった。言わなくても気持ちは通じた。作業中に浴びた線量から、もう現場には復帰できないかもしれない。ただ、仕事を離れても、思いは現場にある。今は心の中で発し続ける。「古里のためにみんな、頑張つてくれ」

東京電力福島第一原発で連日、事故の収束に向けた作業が続く。古里への思いを胸に、強い覚悟で立ち向かう人たちがいる。現場に臨む思いを追った。

伊達3地区 650力所線量詳細調査

国と県 ホットスポット把握へ

政府の原子力災害復旧策本部と県災害対策本部は十一、十二の両日、伊達市の石田地区など三地区で道路や宅地など約六百五十カ所の環境放射線モニタ

まで立ち入り、環境放射線量の調査を行うのは初めて。調査するの戸の計四百八十五戸。住民の了解を得ながら進める。調査により放射線量が高い結果が出た場合、国と県が連携して対策を進める。



荒竹宏之県生活環境部長は十日の県災害対策本部で、伊達市以外でも調査を行うことについて話している。

以上と推定された地域を中心に今回の調査対象地区を選定。県によると、毎時三マイクロシーベルト以上が一年間続いた場合、計画的避難区域の指定基準となる年間二〇マイクロシーベルトを超過する可能性があるという。

また一緒に通学しよう 川俣への送迎バス終了

伊達市以外でも調査を行うことについて話している。

3.11からの福島

原発大難

放射線との戦い

ある朝突然、娘の友達が見えなくなった。福島市の幼稚園に長女を連れてきたお母さんが嘆く。昨日まで娘と遊んでいた友達が、前触れもなく次の日から来なくなってしまうのだという。

誰もが放射線を不安に感じている。その影響かどうかは不明だが、県全私立幼稚園協会によると五月末現在、転園や休園した園児は千五百五十五人に上る。例年ならあり得ない数字だ。

義務教育の小中学校より幼稚園の方が「県外脱出」のハードルは心理的に低いとみられる。周囲に相談して余計な波風を立てるより、何も言わずに引越してしまっただ方が精神的な負担が小さく感じられるらしい。

三日、福島市の福島大では市民グループ「子どもたちを放射線から守る福島ネットワーク」が、反原発を主張してきた作家広瀬隆さんの講演会を開いていた。「議論している時ではない。すぐに子どもたちを避難させるべきだ」。

後悔したくない

010



広瀬さんの講演会の後、避難・疎開の相談コーナーには情報を求める母親らが並んだ

わが子と「県外脱出」探る母

広瀬さんの言葉に背中を押されたのか、講演終了後は避難・疎開の相談コーナーに人だかりができた。避難したくても経済的な問題や家庭の事情で無理だったり、放射線に対する考え方が違ったりするため、母親同士でも込み入った相談には臆病になる。ネットワークの吉野裕之さん(仮名)は「国が大丈夫と言っているため、避難を後

ろめたく感じる保護者は多い」と感じている。行政の除染対策も後手後手の

「中、孤立感を深めているのではないかと見る。山形県の相談窓口には三日も電話が続いた。福島市から近い山形県は人気の避難先だ。県が上限六万円の民間アパートを一年間補助する。家電製品の貸与もある。ほほ卒は埋まったが、問い合わせは途切れぬない。四歳から六カ月まで三人の子どもを持つ福島市森合の主

婦(仮名)は「放射線がどのくらい安全なのか分からない。後悔したくない」と、八月から米沢市に避難することに決めた。三年前に建てたマイホームに残る夫(仮名)とは二重生活になる。一年後はどうなっているか今は想像できない。避難生活が長引けば考えも変わる。新潟県湯沢町のホテ

ルに四月二日から避難している南相馬市鹿島区の主婦(仮名)は最近、新潟市の隣の燕市にアパートを借りた。夫(仮名)は新潟県内で仕事を探している。一歳の長男と家族三人で永住を視野に入れている。「福島に帰りたいけど、放射線のことを考えると仕方がない」と思うようになった。保護者の不安を少しでも減

らそうと市町村も苦闘する。三日、福島市内の福島テルサで国の現地対策本部が開いた放射線の健康影響に関するセミナーでは、首長らが住民を安心させる情報を得ようと質問していた。講師は「年間二〇ミリシーベルト以下では健康に影響は出ないと考えている」と述べたが、安全の確証が得られたわけではない。福島市の小中学校では先月下旬までに約二百五十人が転出した。夏休みにはまた動くと考えられる。佐藤俊市郎教育長は「学校や通学路の除染などの対策を実施しても、不安をぬぐえない保護者は多い。安心のため最大限の努力をする」と話す。見えない不安が親子も行政も包んでいる。

3・11以前の福島はもうない。地震、津波、さらに原発事故という例のない震災は、県民にこれまでとは異なる価値観や考え方を強いている。放射線の恐怖、漂流する住民と自治体、手探りの補償交渉…。県民は国や東京電力という巨大組織、世の中の風評など向き合いながら、新しい福島を築かなければならぬ。この大難をどう乗り越えればいいのか。県民が悩み、もがく姿を伝える。

